教科書文庫
5
810
45-1948
0130449577

中等國語 一

文部省

廣島師範學校男子部附屬中學校

P.T.A.(2)

50614
教科書文庫
5
810
45-1948
0130449577

教科書文庫
5
810
45-1948
0130449577

中等國語

一

文部省

P.T.A.

広島大学図書
0130449577

(2)

中央図書館

広島大学図書
0130449577

目　録

一　あゆのかげ……一
二　ノートの中から……二
三　心の小径……九
四　創始者の苦心……十五
五　雪もちの竹……十八
六　実物とその模型……二十四
七　小品二題……三十三
八　非凡なる凡人……三十九
九　ピノチオ……五十二
附録　國語学習の手引……六十一

一　あゆのかげ

背なかにほくろのあるあゆが
日のさす静かな瀬のうちに泳ぎ澄んでいる。
幾列にもなって、
やさしいからだを光らしている。
その影は白い砂地に
かげ絵のように、
大きくなったり小さくなったりして、
時にはぼやけたりする。
水のかげまで玉をつゞって、
底砂へ落ちて行く。
ちいさい物音にさえ
花のように驚いては散って。
また集まるあゆ。
すらりと群れを抜いた大きなあゆが、

ときどき群れをすべているのか、
すこし瀬がしらへ出たり、
ほこらしく高く泳いでは水面へ
ばちりとはねくり返る。
しんとした波紋がする。
あとは土手の上の若葉のにおいがするばかり。」

（室生犀星の作による）

二　ノートの中から

おもちゃは野にも畑にも

わたしの幼い時のように山の中に育った子供は、めったにおもちゃを買うことができません。たとい、ほしいと思いましても、それを賣る店が村にはありませんでした。

おもちゃがほしくなりますと、わたしは裏の竹やぶの竹や、麦畑にほしてある麦わらや、それからじいやが野菜の畑の方から持って來るなすだの、かぼちゃだのの中へ、よくさがしに行きました。

じいやが畑から持って來るなすは、わたしにへたをくれました。そのなすのへたを両足の指の間にはさみまして、つま先を立てて歩きますと、ちょうど小さなくつをはいたようで、うれしく思いました。

かぼちゃもわたしに、へたをくれました。

「ごらん、わたしのへたの堅いこと、まるで竹の根のようです。これをおまえさんのにいさんのところへ持って行って、この裏の平らなところへ何か彫っておもらいなさい。それができたら、紙の上へ押してごらんなさい。おもしろい印形ができますよ。」と、かぼちゃが教えてくれました。

裏の竹やぶの竹は、わたしに竹の子をくれました。「それで竹の子の手おけを造れ。」と言ってくれました。

「こいつも、おまけだ。」

と、細く竹の割ったのまでくれてよこしました。その細い竹を削りまして、竹の子の手おけにさしますと、それでさげられるようになるのです。水もくめます。わたしは表庭のなしの木やつばきの木の下あたりへ小さな川のかたちをこしらえました。寄せ集めた砂や土を二列に盛りまして、その中へ水を流しては遊びました。竹の子の手おけでさげて行った水が、その小さな川を流れるのを樂しみました。

麦畑に熟した麦は、わたしに穂先の方の細い麦わらと、胴なかの方の太い麦わらとをくれました。

「これをどうするんですか。黄色い麦わらでなけりゃいけないんですか。」

と、わたしが聞きましたら、麦の言うには、

「なに、青いんでもかまいませんが、なるなら黄色い方がいい。麦は熟するほどじょうぶですからね。この細い麦わらの穂先の方を軽く折っておきなさい。氣をつけてしないと、折れて、とれてしまいますよ。それから太い麦わらの節のある下の所を一寸ばかり、おまえさんのつめでお裂きなさい。

これも氣をつけてしないと、みんな裂けてしまいますよ。太い麥わらには必ず一方に節のあるのがいります。それができましたら、細い方の麥わらを太い麥わらの裂けた所へさしこむようになさい。」

なるほど麥の言う通りにしましたら、子供らしいおもちゃができました。

細い麥わらを下から引くたびに、麥の穗先が動きまして、「今日は。今日は。」と言うように見えました。

わたしは、種々なおもちゃが野にも畑にもあることを知りました。竹やぶから取って來た青い竹の子、麥畑から取って來た黃色い麥わらで、おもちゃを手造りにすることの、いうにいわれぬ樂しい心持をおぼえました。

畑のすみにちょうちんをぶらさげたようなほおずきが、わたしにほおずきの実をくれまして、そのしんを出してしまってから、古い筆の軸で吹いてごらんと教えてくれました。筆の軸は先の方だけを小刀か何かで幾つにも割りまして、あさがおの形に折り曲げるといいのです。その受け口へ玉のようにふくらめたほおずきを載せ、下から吹きましたら、軽いほおずきがくる〳〵と舞いあがりました。そしてあさがおなりの管の上へおもしろいように落ちて來ました。

書　籍

一

名もない草が路ばたの石のわきに咲いていました。そこへ学生が通りかゝりました。

「学生さん、今日は。おまえさんは何をそんなに急いでいるのですか。」

と、その草が声をかけました。

「わたしですか。わたしは貧しいものですから、読みたい本も思うようには手にはいりません。でも、わたしはすきですから、いろ〳〵な本を読んで、お友だちにおくれたくないと思うのです。わたしはあっちの人の生涯にも、こっちの人の生涯にも、心の旅をしてみたいと思うのです。わたしは小さな旅人です。それでこうして急いでいるのです。」

と、学生が答えました。

「まあ、この石の上に腰を掛けてみてください。読もうとさえ思えば、本はこの石の上にもありますよ。わたしも名もない草ですが、おまえさんのような人に読んでもらいたいと思って、こうして小さな本を拡げていますよ。」

と、その草は言いました。

二

講堂に近い所に新築せられた赤れんがの建物の二階が、わたしの学校の図書館にあてはめられました。学校には、アメリカ人の教師が多く、その人たちが國へでも帰ろうとするおりに寄附して行ったものもありましたから、その時分の学校の図書館としては、珍しい本も少なくなかったのです。

ある日、私はその二階へあがってみました。大きなテーブルを前にひかえて、本の出し入れを調べている図書館の係も、学校へ來て勉強している人でした。その二階では、高い声で話をする者もありませんでしたから、まるでそこいらは、しいんとしていました。たまに聞えて來るものは、鉛筆を削る音ぐらいのものでした。

わたしは本だなの間を見てまわりました。本と本がたくさん向かい合って並んでいます。だれも読

もうとするものもないような本が、ほこりの間から顔を出しているのもあります。いすでも持って來なければ手のとゞかないような高いたなの上まで、いっぱいに古い本が並んでいます。

そこは書籍の墓地でした。いろ〳〵な本を書いた人たちが、その靜かな所で眠っていました。わたしはそういうお墓の並んでいる所へ行って、そこに眠っている人たちの名まえを、あちこちと讀んで歩きました。

あるお墓の前に行きました。そこにはローマ字で、

詩集　ロバート＝バーンズ著

としてあるのを見つけました。

わたしもまだ少年でした。バーンズというイギリスの詩人を知ったのも、それがはじめての時でした。不思議にも、こちらで少し目を覚ましかけましたら、そこに眠っていると思った人が、お墓から起きあがって來ました。あのバーンズのお墓の方から、青々とした麦畑の中に鳴くひばりの声がして來たり、スコットランドあたりの若い百姓のうたが聞えて來たりした時は、わたしもびっくりしました。その時になってわたしも、そんなお墓に眠っていると思った人たちが、わたしたちの胸に、生きかえり生きかえりする時のあることを知りました。

落ち葉

毎年十月の二十日といえば初霜を見る。雜木林や平坦（へいたん）な耕地の多い武藏野へ來る冬、淺々とした感じのよい都会の霜、そういうものを見なれているさみに、この山の上の霜をお目にかけたい。こゝのくわ畑へ三度か四度もあの霜が來てみたまえ、くわの葉はたちまち縮みあがって燒け焦げたようになる、畑の土はぼろ〳〵にたゞれてしまう……見ても恐ろしい。猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへゆくと、雪の方はまだしも感じが柔らかい。降り積もる雪はむしろ平和な感じを抱かせる。

十月の末のある朝のことであった。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいたかきの葉がおもしろいように地へ落ちるのを見た。肉の厚いかきの葉は霜のために燒けそこなわれたり、縮れたりはしないが、朝日があたって來て霜のゆるむころには、重さに堪えないでもろく落ちる。しばらく私はそこに立って、茫（ぼう）然とながめていたくらいだ。そして、その朝はことに烈しい霜の來たことを思った。

十一月にはいって急に寒さを增した。天長節の朝、起き出して見ると、一面に霜が來ていて、くわ畑も野菜畑も家々の屋根もみな白く見渡される。裏口のかきの葉は一時に落ちて道もうずもれるばかりであった。少しも風はない。それでいて一葉二葉ずつ靜かに地に落ちる。屋根の上の方で鳴くすゞめも、いつもより高く勇ましそうに聞えた。

空はどんよりとして、霧のために全く灰色に見えるような日だった。私は勝手もとのたき火に凍えた両手をかざしたくなった。たびをはいたつま先も寒くしみて、いかにも恐ろしい冬の近よって來ることを感じた。この山の上に住むものは、十一月から翌年の三月まで、ほとんど五箇月の冬を過ごさねばならぬ。その長い冬ごもりの用意をせねばならぬ。

こがらしが吹いて來た。

十一月中旬のことであった。ある朝、私は潮の押し寄せて來るような音に驚かされて、目が覚めた。空を通る風の音だ。時々それが靜まったかと思うと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る。

ことに南向きの障子にはばら〳〵と木の葉のあたる音がしてその間には千曲川の川音も平素から見るとずっと近く聞えた。

障子をあけると、木の葉はへやのうちまでも舞いこんで來る。空は晴れて白い雲の見えるような日であったが、裏の流れの所に立つやなぎなどは烈風に吹かれて髪を振るうように見えた。枯れ〳〵としたくわ畑に茶かっ色に残った霜葉なども左右に吹きなびいていた。

その日、私は学校の行きと帰りとに停車場前の通りを横ぎって、眞綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手ぬぐいをかぶって両手をそでに隠した女だのの行き過ぎるのに会った。往來の人々は、いずれも鼻しるをすゝったり、目の縁を赤くしたり、あるいは涙を流したりして、顏色は白っぽく、ほお・耳・鼻の先だけは赤くなって、身を縮め頭をかゞめて、寒そうに歩いていた。風をうしろにした人は飛ぶようで、風に向かって行く人はまた、力を出して物を押すように見えた。

土も、岩も、人の皮膚の色も、私の目には灰色に見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日のこがらしが野山を吹きまくる光景はすさまじく、烈しくまた勇ましくもあった。樹木という樹木の枝はたわみ、幹も動揺し、やなぎ・竹の類は草のようになびいた。かきの実でこずえに残ったのは吹き落された。うめ・すもゝ・さくら・けやき・いちょうなどの霜葉は、その一日でこと〳〵く落ちた。そして、そこゝに集まった落ち葉が風に吹かれては舞いあがった。急に山々の景色はさびしく、明かるくなった。

（島崎藤村の文による）

三　心の小径

樺太アイヌ語は、北海道アイヌ語とどれほど違うか。樺太アイヌは、どんな物の言い方をしているか。アイヌ特有の叙事詩が、もしやそこにも傳承されていはしないか。今まで抱いていたアイヌ語学上の疑問とその解決とが、この方言に照らして、もしや実証することができるのではあるまいか。こういう空想が、いっぱいに私の心を占めて、夢にまで見る誘惑となり、とう〳〵樺太へ、單身踏査を思い立つにいたったのである。

それは明治四十年の夏のことである。小樽をたったのは七月の十二日、樺太の奥山には、木立にまじって、山ざくらがちらほら咲いているころであった。大泊に船待ちをし、毎日濃霧をかこちながら、しびれをきらして、やっと、米とみそとを用意して、役所の見まわりの小蒸氣に乘せてもらって、目ざす東海岸へ船出をしたのは十二日め。それでも海の上はまだ霧が深く、三晩、船の上に寢て、二十七日の朝、やっと本船のボートで送られて、オチョポッカのアイヌ部落へ最初の足跡を印したのである。

思いに思ってはる〳〵たずねて來たものの、部落の人にとっては、私などどこからか迷って來たいぬころほどの興もひかない存在だった。なまじいに、民政署の船に乘って來た洋服姿は、役所の看守人でもあるかのような印象をさえ與えて、ともすれば、ちょっと疑い深い目を光らせ、私の行く所、立つ所、だれもみな背を向けてしまい、口をつぐんでしまう。笑いさゞめいていた者も笑いをおさめ、

寄り合っていた者も散じてしまう。そのさびしさはたとえようもない。かいもくことばが通ぜず、片言隻語も採集できずに、むなしく一日が暮れて行くのである。

役所の船からおりたものだから、いる所だけは、酋長の冬期の住みかをがらんどうにあけて、ひとりぽつんといさせてくれたのである。また、三度三度の食事は、同じように髪を垂らした入れ墨の娘がかわるがわる來て、默って、私の米とみそとを小なべへ入れて持ち去って、一時間もすると、温かい飯としるとを作って來て、默って置いて行ってくれる。たゞし、物を言いかけたら最後、くんくん逃げて行ってしまう。晝のうちは、まだ絵にかいたようなアイヌの姿をまのあたりに見ているばかりでも慰めになったが、夜になって、鼻をつまれるのもわからないようなやみの中に、いそ打つ波のざあっと引いて行くわびしい音のみを聞いていると、物言う相手もないさびしさがこみあげて、おしの上にめくらにさえ生まれて來たかのような寂寥を感じた。

二日めも同じように暮れ、三日めもまたそれをくり返さなければならなかった。四日めのことだった。さびしさは、もはや單なるさびしさではなく、東京をたって一箇月、ついになんの得るところもなく帰らなければならぬのだろうかという不安と憂悶とが頭をかき乱して、茫然として屋外に立ったちょうどその時——ふと見ると、うしろに子供たちが何かわめきながら、無心に遊んでいる。行くともなく、その方へひき寄せられて行ったのは、ことばの一はしでも拾いたかったからである。じっと耳を傾けると、なんという発音だろう、しゃっくりしながら物言うようなわめきようで、一言も耳にとまらない。たゞし、子供だけに、私が近く立っても、別に氣にもせず、夢中にさえずって遊んでいる。ふと、そのひとりの腰にさがっている小刀にさわって、北海道アイヌ語で「それはなんなの。」

と尋ねてみた。子供らはいっせいに私の顔を見た。と思ったら、一度に「わっ。」とはやしたてて、くもの子を散らすように逃げ散った。「通じないかな。」とひとりつぶやきながら、途方にくれていると、また三々五々集まっては、何か大声にわめきながら遊ぶのである。また寄って行った。今度はことばをかえて、ひとりの子の耳にさげた環を指さして、「なんというものか。」と問うてみた。また振り返って、全部の子供が私を仰いだが、「何を言ってるんだ。」といった調子に、「わあっ。」とわめいて逃げ出した。

子供らのうちに、絵に見る唐子のような着物——多分、満州方面からの外來品——を着ているのがひとりあった。そのかっこうがちょっとおもしろかったので、單語を採集するはずの手帳へ、しょうことなしに、その子を写生しはじめた。

私が、その子を見ては、鉛筆を動かし動かしするのを目ざとく見つけた子供のひとりが、まずなんとかわめいた。他の子も、私を見て、またなんとかわめいた。遊ぶのをよして、みんな私を注視した。まっさきに見つけた子が、まずおず〳〵と、しゃがんでいる私へ近寄って來て、物珍しげに私のかくのをのぞいた。たちまち、どや〳〵とやって來て、みんなでのぞいた。年かさのが、唐子の服装をした子を指さして、「おまえがかかれたぞ。」とでもいうような様子をした。すると、わい〳〵と言い出して、私の横からのぞく者、うしろからのぞく者、中には無遠慮なのが、指を突き出して、もう私の画面をつゝいて、「こゝが頭で、こゝが足だ、手だ。」など言うように、自分の発見を得意になって、説明を引き受けているのさえある。が、ちっともその言うことが聞き取れない。

その時だった。ふと思いついて、一枚新しい所をめくって、だれにもすぐわかるように、大きく子

供の顔をかいてみた。目を二つ並べてかくと、年かさのが、一番さきに「シシ、シシ」と言った。他の子供も「シシ」、他のも「シシ」。とう〳〵、さしのぞいていた子供の口がみな「シシ」、「シシ」、「シシ」。騒がしいといったらない。そのさまはちょうど、「目だよ、目なんだよ。」「うん、目だ。」「目だ、目だ。」とでも言うように聞えたのである。

そうだ、北海道アイヌは「目」をば「シク」という。樺太ではそれを「シシ」というのかもしれない、ということが頭へひらめいた。急いで絵の目から線を横へ引っぱって、手帳のすみの所へ shish と記入し、それからゆう〳〵と鼻をかいて行った。年かさの子が、鋭い声で「エトゥープイ、エトゥープイ」と叫ぶ。と、残りの子供らも、声々に「エトゥープイ、エトゥープイ」。私はおかしくなったのをこらえて、また鼻の尖端から線を引いて行って、その端へ etu-pui と書きこんだ。そうして、口をかいて行くと、やっぱり年かさの子をまっさきに、「チャラ、チャラ、チャラ」と大騒ぎ。まゆをかくと、「ラル、ラル」。頭をかくと、「サバ、サバ」。耳をかくと、「キサラープイ、キサラープイ」。

たちまちのうちに肢体の名が十数箇、期せずして採集できた。おかしいやら、愉快やら。こうなったら、もうなんでもない。向こうから争って言ってくれるのだから。

たゞ、私は、「なに」という一語がほしくなった。それさえわかれば、心のまゝに、物をさして、その名を聞くことができるのである。そこで、ふと思いついて、もう一枚紙をめくって、今度はめちゃくちゃな線をぐる〳〵、ぐる〳〵引きまわした。年かさの子が首をかしげた。そうして、「ヘマタ」と叫んだ。すると、他の子供もみな変な顔をして、口々に、「ヘマタ」、「ヘマタ」、「ヘマタ」。

うん、北海道で「なに」ということを「ヘマンダ」という。これだ、と思ったから、まず試みようと、身のまわりを見まわして、足もとの小石を拾って、私からあべこべに「ヘマタ」と叫んでやった。驚くべし、むらがる子供らが私の手もとへぐる〳〵した目を向けて、口々に、「スマ、スマ」と叫ぶではないか。北海道で石のことを「シュマ」という。してみると、「スマ」は石のことで、そうして、「ヘマタ」はやっぱり「なに」ということに違いなさそうだ。

そこで勇氣を得て、も一つ足もとの草を手にむしり取って、「ヘマタ」と高くさゝげると、子供たちは、「ムン、ムン、ムン」と、ぴょんぴょん跳びながら答える。私はうれしさに、子供らといっしょにぴょんぴょん跳んで笑った。

おかしかったのは、私が自分の五厘ぐらいしかない七、八本のあごひげをつまんで見せて、「ヘマタ」と尋ねた時である。声に應じて、子供らは「ノホキリ、ノホキリ」と答えてくれたので、nohkiri「あごひげ」と記入した。なんぞ知らん、それは下あごだった。ひげづらになれているアイヌの子供たちの目には、私のつまんだひげなどは、ひげの数にはいらないので、私の指はあごをつまんでいると思ったのである。

私はこうして、たちまちのうちに七十四箇の單語を採集して、元氣づいた。おりから、河原に集まってますを捕らえている大勢の大人たちの所へおりて行って、覚えたばかりのほや〳〵の單語を勇敢に使ってみた。河原の石を指さしては、「スマ」と叫び、青草を指さしては、「ムン」、ますを見ては、「ヘモイ」、ますの頭を指さしては、「ヘモイーサバ」、ますの目を指さしては、「ヘモイーシシ」、ますの口を指さしては、「ヘモイーチャラ」。

これまで、むずかしい顔ばかりしていたひげづらが、もじゃもじゃのひげの間から白い歯を現わし

た。これまで、そむけそむけしていた婦女子の顔にも、まっさおな入れ墨の中から白い歯が見えた。明らかにみな笑ったのである。中には、向こうから、網を持っている手を振って見せて、「ヤー（網）」と言ったり、砂地を指さして「オタ（砂）」と言ったりした者もある。急いで手帳に書きつけながら、その発音をまねすると、不思議そうに手帳を見に寄って來る者もあった。婦女子の群れでは、「いつ覚えたろう。」とか、「よく覚えたものだ。」とか言うらしい感嘆の声をあげた者もあった。

こうした間に、私と全舞台との間をさえぎっていた幕が、一ぺんに切って落されたのである。さしも越えにくかった禁園のかきねが、急に私の前に開けたのである。ことばこそ、固くとざした心の城府へ通う唯一の小径であった。渠成って水いたる。こゝにいたって、私は何物をもためらわず、すべてを捨てて、まっしぐらにこの小径を進んだ。

一週間の後には、ちょっと私が顔を出しても、右から左からことばを投げられる。朝起きて、河原へ顔を洗いに手ぬぐいをさげて通ると、両側のアイヌ小屋から「どこへ行きますか。」「どうしたんですか。」などと、まるでたんぽのあぜの一歩一歩にいなごがばた〳〵と跳び出すように、入り乱れてことばがかゝって來、私がうまく答えられたといっては笑い、とんちんかんに答えたといっては笑う。顔を洗っていると、もう子供たちが起きて、うしろへいっぱいやって來ている。夜は、さしもがらんどうな私の宿もいっぱいになって、身動きもならないほど、若い者や年寄りが詰めかけて、踊る、歌う、しゃべる。

四十日の滞在の後に、たいていの話は支障なくできるようになった上、樺太アイヌ語文法の大要と語彙と、北蝦夷古謡遺篇三千行の叙事詩の採録を家づとに、私は生涯忘れがたい思いを残して、この部落の老若に別れを告げた。

（金田一京助の文による）

四　創始者の苦心

蘭学事始

小塚原に腑分けを見たりし翌日、良沢が宅に集まり、前日のことを語り合ひ、まづ、「ターフル＝アナトミア」の書にうち向かひしに、まことに艪舵なき船の大海に乗り出だしがごとく、茫洋として寄るべきなく、たゞあきれにあきれてゐたるまでなり。されども、良沢はかねてよりこのことを心にかけ、長崎までも行き、蘭語ならびに章句・語脈の間のことも少しは聞き覚え、聞き習ひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁はいまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、やうやくに文字を覚え、かの諸言をも習ひしことなり。

さて、この書を読み、いかやうにして筆を立つべきかと談じ合ひしに、「とても、はじめより内象のことは知れがたかるべし。この書の最初に仰伏全象の図あり。これは表部外象のことなり。その名処はみな知れたることなれば、その図と説の符号を合はせ考ふることは、取り附きやすかるべし。図のはじめとはいひ、かたゝまづこれより筆を取りはじむべし。」と定めたり。即ち、解体新書形体名目篇これなり。そのころは、助語の類も、いづれが何やら心に落ち着きてわきまへぬこと故、少しづつは記憶せし語ありても、前後いつかうにわからぬことばかりなり。例へば、「まゆといふものは

日の上に生じたる毛なり。」といふやうなる一句、髣髴として、永き日の春の一日には明らめられず、日暮るるまで考へつめ、互ににらみ合ひて、わづか一、二寸の文章、一行も解しえざるほどにてありしなり。

また、ある日、鼻のところにて、「フルヘッヘンドせしものなり。」とあるにいたりしに、この語わからず。これはいかなることにてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。そのころ、辞書といふものなし。やうやく長崎より良沢求め帰りし簡略なる一小冊ありしを見合はせたるに、「フルヘッヘンド」の釈注に、「木の枝を断ちたる跡、その跡フルヘッヘンドをなし、また、庭をさうぢすれば、その塵土集まりフルヘッヘンドす。」といふやうに読み出だせり。これはいかなる意味なるべきかと、また、例のごとくこじつけ考へ合ふに、わきまへかねたり。時に翁、「思ふに、木の枝を切りたる跡いゆればうづたかくなり、またさうぢして塵土集まればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中にありて堆起せるものなれば、『フルヘッヘンド』は『うづたかし』といふことなるべし。されば、この語は『うづたかし』と訳してはいかん。」と言ひければ、おの〳〵これを聞きて、「はなはだもつともなり。『うづたかし』と訳さば正当すべし。」と決定せり。その時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の璧をも得し心地せり。

かくのごときことにて、推して訳語を定めたり。その数も次第次第に増し行くこととなり、良沢のすでに覚えゐし訳語書き留めをも増補しけるなり。その中にも、「シンネン」などいへること出でしにいたりては、いつかうに思慮の及びがたきことも多かりき。これらはまた、行く〳〵は解すべき時も出で来ぬべし。まづ符号を附けおくべしとて、丸の中に十文字を引きて記しおきたり。そのころ知らざることをば「轡十文字」と名づけたり。毎会いろ〳〵に申し合はせ、考へ案じても、解すべからざることあれば、その苦しさのあまり、それもまた「轡十文字」「轡十文字」と申したりき。しかれども、「なすべきことはもとより人にあり、成るべきは天にあり。」のたとへのごとくなるべしと、かくのごとく思ひを労し、精をすり、辛苦せしこと一箇月に六、七回なり。その定日は忘りなく、わけもなくしておの〳〵あひ集まり、会議して読み合ひしに、実に「不味者は心。」とやらにて、およそ一年あまりも過ごしぬれば、訳語もやうやく増し、読むにしたがひ、自然とかの國の事態も了解するやうにて、のち〳〵はその章句のあらさ所は、一日に十行も、その余も、かくべつの労苦なく解しうるやうにもなりたり。もつとも毎春参向の通詞どもへも聞きたゞしことあり、またその間には解屍のこともあり、獣畜を解きて見合はせしこともたび〳〵なりき。

この会業怠らずして勤めたりしうち、次第に同臭の人もあひ加はり寄りつどふことなりしが、おのおの志すところありて、一様ならず。翁はひとたびかの國の解剖の書を得、直ちに実験し、東西千古のたがひあることを知り明らめ、治療の実用にも立て、世の医家の業にも、発明ある種にもなしたく、一日も早くこの一部を用立つやうになしみたしと志を起ししこと故、他に望むところもなく、一日会して解するところはその夜飜訳して草稿を立て、それにつきては、その訳述のしかたを種々さま〳〵に考へなほししこと、四年の間に草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すにいたり、つひに解体新書飜訳の業成就したり。

そも〳〵江戸にてこの学を創業して、腑分けと言ひ古りしことをあらたに解体と訳名し、かつ社中にてたれ言ふとなく蘭学といへる新名を首唱し、わが日本國中の通称ともなるにいたれり。これ今時

の隆盛をいたしし嚆矢なり。今をもつて考ふれば、これまで二百年來、かの外科法は傳はりしなれども、直ちにかの医書を訳すといふことは絶えてなかりしが、この時の創業、不可思議にも、およそ医道の大経大本たる身体内景の書にて、これが医書新訳の起始となりしは、不用意をもつて得しところにて、実に天意とやいふべき。

五　雪もちの竹

今から五十年ほど前のことです。はっきりというと明治二十八年一月、日清戰爭の最中のことです。アメリカのエール大学の教授で、心理学の大家であるラッドという学者が、向こうの雜誌に、日本人の氣質について、意見を発表しました。

その説をごくかいつまんで申しますと、日本人は感情的な國民だというのです。あることに感激すると、急にそれに熱中するが、しかし、うまく行きそうもないと、ぷいとほうり出してしまう。移り氣で、しんぼう強いところがない。それに正しい常識が発達していないため、人民の幸福とか、社会正義とかいうようなことについては、ほとんど考えていない。たゞ上から與えられた忠孝という観念だけを、無上の道德と信じている。だからかれらは主君のためには、惜しげもなく、自分のいのちを投げ出したり、最愛の子どもをぎせいにしたりするというような残忍なことさえも、平氣でやる。日本人は賢い國民であり、美しい感覚を持っているが、感情的で、批判力に乏しいことが問題である。おそらく日本人は、今後世界の注意をひくだろう。しかしながら、強い道德的な力によって、その氣風が改められないならば、日本人は、世界の人民のうちで、偉大な國民とはなれないだろう。だいたい、このようなことをいっているのです。

みなさんは、この話を、どうお聞きになりましたか。最初に申しましたように、これは五十年も前の意見です。しかも、その時、日本は、のぼり坂の時代にあったにもかゝわらず、わが國をこういうふうに見ておったということは、実に、ぎょっとさせられます。ことに最後のところで、「もし、強い道德的な力によってその氣風が改められないならば、日本人は偉大な國民にはなれないだろう。」といっている点は、五十年まえに、よくもこれだけ日本を見ぬいたものと、たゞ〳〵舌を巻くばかりです。今われ〳〵は偉大な國民になれなかったくらいではありません。世界において、最もみじめな國民になりさがってしまったのです。

こういう結果になったのは、もちろん、軍國主義者や、その手さきの者のしわざに相違ありません。けれども、罪のあるのはそういう連中だけではありません。國民の氣風、國民の道德、そういうものの中にも、大きな責任があると思います。軍部や右翼がのさばったのは、確かに悪いには相違ありませんけれども、しかし、それをのさばらせたのは、國民の中にも、それをのさばらせる何かがあったからです。もし、國民の氣風、國民の道德が、このまゝであるならば、どれだけ戰爭犯罪者が罰せられても、また一方で、いくら新日本の建設などと叫んでも、日本は、ほんとうには、立ちあがれないと思います。

けれどもこのことは非常に大きな問題で、短いラジオの講演では、とても、まとめることは困難ですから、こゝでは、私はさくらの花を例にとって、いくらか、それと、つながりのある話をしてみま

しょう。

「花」といえば、さくらとさまっているくらい、さくらは、日本の代表的な花になっています。なぜさくらが、こんなに國民にすかれるのかというと、むろん、その花が美しいからに違いありませんが、その美しさがあくどくなくて、ほんのりとした、あわい感じのものであることも、日本人の趣味に合っているからでしょう。また、「ぱっと咲いて、ぱっと散る。」というところなども、氣みじかな、にぎやかなことのすきな、日本人の氣性に、ぴったり、はまるのかもしれません。ことに、その散りぎわは、ふぜいがあるので、昔から詩や、歌に、たくさんよまれています。それから、散るということと、佛敎の「無常」という思想が結びついて、この花のかげに宗敎的なものが、いつか宿るようになってきますと、つゞいて「花はさくらぎ、人は武士。」などということわざが生まれてきます。散りぐあいのいさぎよいところが、いのちよりも名誉を重んずる武士の間で、ほかの花よりも一段と尊重された原因ではないかと思われます。そして、この見方、氣風というものは、單に武士階級だけでなしに、廣く一般民衆にまで及んでいったものなのです。

日本人の氣質というものは、ラッド敎授のいうように、感情的というひと色で塗りつぶせるものかどうか、私は疑いを持っておりますが、しかし、とにかく、日本人が感情的だという点は、これはいなむことができないと思います。そして、そういう感情的な國民であるところから、さくらのような、散りやすい花に感激するのだと思います。しかし、散るということに、あまり價値をおき過ぎると、どんな場合にでも、いのちを投げ出しさえすれば、それが最高の道德だと、そんなふうに考える人間が出てきます。批判力の乏しい、感情的な人々の間では、これは、起りがちなことなのです。しかし、これでは、「人間は、一体、なんのために生き、なんのために死ぬのか。」さっぱり、わかりません。日本では、いのちを捨てることを、一つの道德のように敎えこんでいますが、こんな危險な思想はありません。死ぬことよりも、まず生きることです。人間は、何を信じ、何をなすべきであるか、これが、まっさきの問題です。信ずるものの対象を誤り、なすべきことを取り違えたら、個人としても、國民としても、滅びるよりほかはないでしょう。信ずべきもの、恐れ、つゝしむべきものは、この世には、たゞ一つしかありません。心から、かしらを垂れるべきものは、あまが下には、ただ一つしかありません。人間はその一つのもののためにのみ、生きながらえてゆくべきです。万一、どうしても生命を断たなければならないという、よぎないはめに陷ったとしても、それは眞理のため、正しい主義主張をたて通すという場合にのみ、許されることであって、そのほかは、考えられません。たといそれは、「忠義」という名目であっても、生命をなげうつべきものではありません。人間は、どこまでも生きぬくことに全力を盡くすべきであって、それが、生まれてきたものの最大の責任です。いのちを投げだすことを、最高の道德だと考えたり、それをほめたゝえる思想は、封建主義的な思想です。こういう氣風というものは、ぜひとも、根だやしにしなければなりません。それでなくては、ほんとうの学問は栄えません。よい文化は生まれてきません。平和な國はうち立てられません。

その意味で、私は、さくらの花を、あまりもてはやすことに、大きな疑問を持っています。それは、もとよりさくらに罪があるわけではありません。さくらに、さま〳〵な意味をつけている人間に罪があるのです。しかし、この花になすりつけられている「意味」は、もう洗い落すことができないほど

深いものになっています。そして、その「意味」なるものは、たゞでさえ感情的な民衆を、いよ〳〵はしゃぎまわらせ、うわっ調子にし、生命をかろんずる氣風を、高めがちです。しかも、この花の中からは、これからの日本人にとって最も大事な、ねばり強い氣力、一つの新しいものを、どんな苦労をしてでも、築きあげようとする精神、そういうものを、読みとることはできません。この花は、古い日本精神を代表することはできても、新日本の道德を象徴する資格はないと思います。

私は、昔から竹がすきです。前のうちでも、今の住まいでも、私は庭や入口に、竹を植えております。「わが宿のいさゝむら竹吹く風の」という、家持（やかもち）の有名な歌がありますが、竹の葉ずれの音を聞く味わいというものは、格別なものです。それに、すうっとまっすぐに突っ立っている形も、私はすきなのです。途中で曲がったり、くねったりしないで、いちずに天を目ざしている姿は、たゞ一つのものだけを信じて、生きてゆこうとしている心と、何か似かようものがありはしないでしょうか。

また竹は、どんな時でも、一本だちでいるということがありません。自分ひとりだけ太ろうとか、高く伸びようとかいう氣持もありません。かれらは、いつも同胞といいますか、社会といいますか、みんながいっしょになって共同の生活をしています。そして土の下で、しっかりと手を握り合っています。かれらは暴力によって、切り離さない限り、感情や利害によって、分裂するというような、そんな卑劣なことはしません。

それから、あのつや〳〵した幹の色はどうでしょう。照りを帶びた、あの緑の色の、しぶい趣は、どうでしょう。しかも、春・夏・秋・冬、四季を通じて、決してその色を変えるということがない。それは幹だけではありません。小枝の先のさゝっぱにいたるまで、堅く操を守っています。春から夏にかけて、わか竹が、すく〳〵と伸びてゆきますが、これは、さまって、おや竹よりも太い。そして、せいも高くなります。子の方が親よりも、若ものの方が老人よりも、りっぱなものになってゆくところも、私は実に、うれしく思っています。それに、竹の子がたべられることも、ありがたいことです。うちに出た竹の子を、子どもたちといっしょに掘るのは、なか〳〵楽しみなものです。

また竹は、幹の中がからんどうですが、それでいながら実にじょうぶです。ちっとやそっとの力では、容易に折れません。これは力学の法則にもかなっていることなのです。竹はあんなふうに見えても、なか〳〵科学を知っているわけですね。いや、そればかりではありません。意志の力も非常に強いのです。竹は常に天を目ざすことを忘れていませんが、しかし冬になって、雪がきた時には、閉口します。かれはしかたがなく、かしらを垂れます。だが、どん〳〵雪が降り積もってくると腰まで曲げなければなりません。ついには、あたまを地面にこすりつけられる。けれどもかれは、じいっとこらえている。どんなに、上からの力が強かろうと、口を結んでこらえている。決して、ぽきんと折れるような、ふがいのないまねはしません。雪は必ず、いつかは降りやむことを知っているからです。そして雪があがったら、自分の力で、積もっているものを拂い落して、ぴいんと、もとの姿に返ってゆきます。

もちろん、竹をこんなふうに見ることは、問題です。しかし、氣のめいった時には、私はおり〳〵こんなことを考えて、自分を励ますこともあります。しかし、自分が竹がすきだからといって、私は、自分の趣味を他人に押しつけようとは思っていません。けれども、日本は今、きびしい冬のさ中に立っているのです。当分、春がくるとも思われません。花が咲き、つばめの飛んでくる季節がこよ

うとも、それは、われ〳〵の春ではありません。われ〳〵は、なお、幾年も、幾年も、深い雪の下で、苦しい生活を、忍ばなければならないのです。その意味で、この話はみなさんの心構えの上に、また國民の氣風を高める上に、多少の参考にならないこともないと思います。

（山本有三の文による）

六　実物とその模型

一

われ〳〵がことばを用いて物を考える時には、まず、一々の実物に名を附け、実物のかわりに名を用いて考えるが、物に名を附けるに当たっては、無意識ながら一種の細工を加えるために、実物それ自身と、その名によって言い表わされる物との間に、いくらかの差が生じている。一種の細工とは、即ち、実物を模型化することであるが、これが、一方においては、ことばの便利な点であり、また他方においては、ことばが人間を誤らせるもとでもある。実物に名を附けて、これを模型化する際に行われるおもな細工は、似た物を同じ物とみなすことと、境界のないところに境界を造ることである。

私は、数年前に、「境界なき差別」と題して、およそ宇宙間の物には、差別はあるが境界はないと論じたことがある。これは、私が、ことばを離れて直ちに実物に接してみると、ぜひとも、この点に氣がつかねばならぬと、感じたことを述べたのであるが、今これをわかりやすくするために、まず、差別はありながら境界のないことの、最もめいりょうなものの例をあげてみると、にじの色などもその

一つである。紫・紺・青・緑・黄・かば・赤と七色の差別は明らかであるが、その間に判然たる境はどこにもない。赤からは自然にかばに移り、かばからは自然に黄に移り、同じ色のところはどこにもなく、また、急に飛んで移るところも一箇所もない。晝夜の差別もその通りで、晝は明かるく、夜は暗く、その差別は明らかであるが、夜が明けていつとはなしに朝となり、日が暮れていつとはなしに晩となって、その間に、判然とした境界はどこにもない。四季の差別もこれと同じく、知らぬまに春は夏になり、知らぬまに夏は秋になる。暦を見れば、何月何日が立春で、何月何日が立夏であると書いてあるが、実際その日になってみると、前日に比べてなんの異なったこともない。晴雨のごときも、明らかに晴れた日と、明らかに雨の降る日との差別はめいりょうであるが、その間に種々の程度の曇った日があって、晴天に入れてよいか、雨天とみなしてよいか、判断に苦しむようなあいまいな天氣も、決してまれでない。寒暖といい、長短といい、黒白といい、およそ、対をなしたことばは、その両端を取れば差別はめいりょうであるが、その間には、どこにも判然たる境界のないものばかりである。中華民國や日本の絵では、雲に明らかな境がえがいてあるが、実物に接してみると、きわめて漠然たるもので、富士山などに登る時には、知らぬまに幾度も雲にはいったり、雲から出たりしている。地図を開いて見ると、海と陸地との境が明らかな線で示してあるが、実際に海岸へ行って見ると、波が絶えず寄せたり返したりして、どこまでが陸地の領分で、どこからが海の領分やら、正確に定めることはできない。このように、常々明らかに境界があるごとく考えていたものも、実物に当たってみると、決して、そこに境界はない。森や、やぶの周囲の境なども、その通りで、地図にはかけるが、実際には存在しない。きれいに断ち切った紙の縁などを見ると、いかにもそこにめいりょうな境界があるごと

く思われるが、これは、肉眼で見るために生ずる誤りであって、もしも、これを何百倍かの顯微鏡で見たならば、無数の纖維が不規則に乱れまじって、あたかも竹やぶのごとくに見えるであろうから、ここにも決して、判然たる境界を定めることはできない。以上は、空間における境界について述べたのであるが、時間における境界も、これと同様で、常々境があると思っていることでも、実際を調べてみると、決して境は附けられない。例えば、だれは何月何日の何時何十分に生まれたとか、何時何十分に死んだとかいって、生まれるのも、死ぬのも、時の一点にあるごとくにみなして、人間の生涯の始め終りにめいりょうな境を附けておくが、実際には、生まれるには、生まれはじめてから生まれおわるまでに、相当に時間がかゝり、死ぬにも、死にはじめてから死におわるまでには、相当に時間がかゝる。その上、今が生まれはじめる時であるとか、今が死におわった時であるとかいうことも、決して判然とはいわれぬ。電燈のスイッチを一つひねれば、たちまち明かるくなり、またひねれば、たちまち暗くなって、明かるかった時と暗くなった時との間にも、判然たる境があるごとく思われるが、これも、電氣が來て細い糸が光を放つまでには、いくらかの時がかゝり、電流が絶えて光が消えるまでにも、いくらかの時がかゝる。たゞ、その時間がはなはだ短いので、われ〳〵にはあたかも、なんの長さもない時の一点のごとくに感ぜられるのである。かりに、特別急速度の活動写眞で撮影し、これをきわめて緩やかに映したならば、あたかも、夜が明けて朝になり、日が暮れて夜になるのと同様な変化があるだけで、決して、その間に境界はないであろう。

また、普通のことばではあい対立するもののごとくにみなし、かつ、その間に判然たる境があるかのごとくに思っているもので、実際には、決して対立しないものが、いくらもある。例えば、曲と直とか、動と静とかいう類がそれである。曲という中には、はなはだしく曲がったものから、わずかに曲がっているものまでの間に、無数の種類があるが、直というのは、全く曲がらぬものがたゞ一種あるのみである。その上、実際について調べてみると、絶対に曲がっていないというものは、ほとんど一つもなく、多くは、かすかに曲がっているものの曲がりを大目に見て、直と名づけているにすぎない。

動と静ともこれと同様で、動という中には、はげしい動からかすかな動までの間に、無数の種類があるが、静というのは、全く動かぬというたゞ一種があるのみである。その上、実際には、絶対に動かぬというものは、ほとんど一つもなく、たゞ、動きようのかすかなものを、かりに静と名づけているにすぎない。有と無とか、異と同とかいうのも、理屈は全くこれと同じで、有には、多量にあるものから、きわめて微量にあるものまで、無数の種類があるが、無には、全くないという一種類しかない。異にも、はなはだしく異なるものから、かすかに異なるものまでの間に、無数の程度があるが、同には、絶対に異ならぬという一つの場合しかない。かように考えてみると、曲と直、または、動と静というごとき対語は、決して、同じ價値に反対の符号を附けたというようなわけのものではなく、直とは、わずかに、無数に並んでいる曲の一方の極端に位する一点にすぎず、静とは、わずかに、無数に階段のある動の一方の極端に位する一点にすぎない。ことばをかえていえば、曲の最も少ないのが直であり、動の最もかすかなのが静である。したがって、直は曲の中の特殊の場合、静は動の中の特殊の場合と考えるのが、至当と思われる。更に、同じ考え方で推せば、無は有の一種、同は異の一種と断定することができるが、この考えをもって、実物に接してみると、実際はいつもその通りで、

有と無との間にも、異と同との間にも、決して境はない。氣をつけてみると、世間の人々が同じとみなしている物も、決して眞に同じではなく、ことゝ〳〵く少しずつ必ず違っている。

私は、ことばから離れて、直接に実物に当たってみた結果として、次の通りに考える。世の中には、差別はあるが境界はない、また、同じ物が二つは決してないと。

二

ところが、前にも述べた通り、ことばを用いてものを考えるには、まず、実物にそれ〴〵名を附けてかゝらねばならぬが、物に名を附ける際には、知らず知らずの間に、脳で細工を施して、実物と、それに附けた名が表わす物との間に、差を生ぜしめている。即ち、名が表わす物は、実物それ自身ではなくて、人間がそれに細工を加えて造った模型である。そうして、その細工というのは、一つは、似たものの間の相違をけずりとって、全く同一の物にすることで、他は、境界のないところに勝手になわを張って、領分の境をめいりょうならしめることであるが、これだけの細工を施せば、実物はそれだけ変化して、もはや、実物のまゝの実物ではなく、單に取り扱いに便利な模型となってしまう。例えば、いぬを見て、これに「いぬ」という名を附ける場合には、一匹一匹のいぬの間に見られる種々の相違を、ことゝ〳〵くけずりけずって、すべてのいぬに共通な性質だけを備えた模型に造り改め、それにいぬという名を附けているのである。実際に生きているのは、ペスとか、シロとかいう一匹一匹のいぬであって、大きいのや、小さいのや、黒いのや、白いのや、一匹ごとにそれ〴〵違っている。いぬという名が表わしているようないぬの模型は、むろん実際には存していない。ねこでも人間でも、なつでもうめでも、およそ普通名詞ならば、みな、こゝに述べたと同様の方法で、実物から造りなおした模型に附けた名まえである。かような次第で、名が代表しているのは、実際に存する実物そのものではなくて、実際には存在していない模型であるが、これが、即ち、物を考えるに用いる道具として、ことばが最も有効であるゆえんである。もしも、人間が、実物をたゞそのまゝに見るだけの力しか持たず、これを模型に造りなおしてそろえるという力がなかったと仮定したならば、「このいぬは黒いが、あのいぬは白い。」というような、簡單きわまる文句さえも言いえず、したがって、それ以上にこみいった考えは、全くできなかったに違いない。されば、実物を模型化して、それに名を附けるという脳髄の働きは、実に、人間の文化発達の根底の一つとみなしてもよいであろう。

なお、物に名を附けて、その名の意味を正確に定めようとすれば、本來境界のないところに、勝手に境を造らなければならない。これも一種の模型化である。もっとも、物の名を漠然たるまゝに使っていれば、その境を定めずにおいてもなんのさしつかえをも感ぜずにすむ。例えば、身体の部分についても、腹が痛いとか、背中がかゆいとか、手首を蚊にさされたとか、わきの下にはれものができたとかいって、それですませている間は、わざ〳〵境界を定める必要も起らないが、腹とはどこからどこまでをいうか、背中とはどこからどこまでをいうかと、やかましく論じて、一字一字に確かな定義をくだそうとすると、ぜひとも境をこしらえてかゝらねばならぬ。即ち、解剖学書のさし絵にあるごとく、人体の表面に幾つもの線を勝手に引いて、数多くの区域に分け、こゝが上腹部とか、こゝが下腹部とか一区一区の領分を定める必要を生ずる。人間をはだかにして、人体の実物を見ると、その表面には、なんら区域の境界はないのに、解剖学書の人体の図を見ると、あたかも地図のごとくに、一面に境界線をえがいてあるが、これが実物と模型との相違である。物に名を附け、名に定義をくだそ

うとすれば、よんどころなく、境のないところに境を造らねばならぬが、それだけの細工を加えた以上は、その物は、もはや、実物のまゝでなくて、一種の模型となりおわっている。

差別のあるものは、これを差別的に取り扱うのが当然であろうが、どこかに境界を設けぬと、差別的の扱いはできない。例えば、汽車賃にしても、わずか四キログラムにたりない赤子も、百キログラムもある大男も、同じ金額を拂わせるのは、いかにもむちゃのようであるが、さりとて、体重に比例した賃金を拂わせることは、手数がたいへんで、むろん実行はできぬ。そこで、せめては、赤子と子供と大人との三階級に分けて、そのくらいの程度で差別的の取り扱いをしようとすると、赤子と子供との間にも、子供と大人との間にも、たゞ次第に移り行きがあるだけで、どこにも判然たる境界はない。やむをえず、五歳以下は無賃とか、十二歳以下は半額とか、勝手なところに境を設けて取り扱ってはいるが、元來、そこに境界があるわけではない。およそ物に名を附け、名に定義をくだそうとする場合には、いつも汽車の差別的賃金の定め方と同じく、天然には、なんの境界もないところに、便宜上、一本の線を引いて、それを境とみなすのほかはない。したがって、いかなる定義にも、少数の、その網の目をくゞるものがあることは避けられない。哺乳類とは溫血、胎生で、からだは毛髪をもっておゝわれている脊椎動物であるという定義に対し、かものはしのような卵生のものや、くじらのような毛の一本もないものがあっても、これは、もとよりやむをえぬことで、定義とは、元來かような性質のものであることを承知しておく必要があろう。

三

物に名を附ける際には、一箇一箇の間の相違をけずり去り、似た物を同じ物に造りなおすといったが、数を数えるということは、同じ物が、幾つかそろっている場合に限り、行われうることである。ところで、私が、実物に直接に触れて経驗したところによると、世の中に全くあい同じというものは、決して二つとはない。いかによくあい似た物でも、よく調べてみると、その間には、必ずいくらかの相違がある。これを、あい同じと見るのは、相違の点をけずり去って、そろった模型に造りなおしたからである。一つ〳〵みな違っている実物については、1+1=2ということもできねば、1×2=2ということもできない。かような式が成り立つのは、たゞ人間が自分の脳髄の働きで造りあげた模型についてのみである。されば、数学なるものは、その性質上、全部、模型に対してのみ、よく当てはまるものであるが、模型に当てはまりさえすれば、数学の用はそれで十分であって、実物には当てはまらぬといっても、もとよりそのために数学の價値がさがるということはない。

果物屋の店に、りんごの荷が到着した。中からは一つ〳〵大きさ・色・味、傷の有無、その他さま〳〵の点で、互にあい異なったりんごが、数百箇出て來た。かりに大きさによって一列に並べたら、最大のものから最小のものまで、次第に移り行くだけで、その間に、どこにも一足飛びのところはない。これが、実物そのまゝの姿である。ところが、果物屋の主人は、販賣の都合からこれを幾組かに分け、最も大きな組は一箇十二銭、次の組は一箇十銭、次は九銭、次は八銭と、一々札を立てて階段的に陳列した。かような取り扱いを受けたために、各組のりんごは、一つ〳〵の間の相違は全く無視せられて、みな同一の價値を附けられ、上の組の末席のものと、次の組の首席のものとの間には、天然にはなんの境界もないところへ、明らかな境を定められ、その境のあちらとこちらとでは、りんごの値が一銭または二銭違うものと定められた。これは模型化せられたりんごの姿である。そこへひと

りの客が來て、十二錢のを五つと、十錢のを十二買って、一円八十錢拂って行った。模型化せられてあったために、計算がすこぶる容易で、賣手も買手も大いに樂をする。もしも、模型化せられていなかったならば、掛け算も寄せ算もできず、不便きわまりないことであろう。されば、実際の取り扱いにおいては、実物を模型化することは、やむをえぬことであり、かつ、行えばきわめて能率の高まることである。

人間が、ことばを用いて物を考えるに当たり、物に名を附けて、名にたよって考えを進めて行く際には必ず、以上の果物屋の主人が、りんごに対して行ったのと、全く同じことをしている。即ち、実物を模型化して、取り扱いに便利にする。あるいは、差異をけずり去って、似た物を同じ物に造りなおしたり、あるいは、数多くの物を幾つかの組に分けて、組と組との間には、元來、境界などのなかったところに、勝手に境界を造ったりする。ことばが、物を考える道具として役に立つのは、全く実物に対して、かような細工を加えるからである。

四

以上述べたように、ことばにたよって物を考える際には、まず、実物を模型化して、模型を実物のかえ玉に使っているということは、私などから見ると、明らかすぎるほど明らかに思われるが、一般からは、ほとんど認められていないようである。それはなぜかと考えるに、おそらく、なれすぎて、全く感じなくなったためであろう。習慣というものは恐ろしいもので、常々見なれたものは、それが、当然のように思われ、それと異なったものは、変に感ずる。例えば宇宙間に地球がころがっているには、上もなく、下もなく、横も縦もないわけであるが、常々地球儀や、地図を見なれているために、北極が上を向いていないと、なんだかまちがっているように感じ、オーストラリアを上にした地球の図を見ると、あたかも地球がさかだちをしているような氣がする。また地球がその軌道を進んで行くには、いつもほゞ同じ速力で走り続けているのであって、決して、電車のように停留所でとまったり、動き出したりするようなことはないにもかゝわらず、十二月三十一日と、一月一日との間を、年の境と定めておくと、長い間の習慣の結果として、その時が來ると、なんだか、すべての物が改まるかのような感じが生ずる。されば、ことばを用いて物を考えるに当たって、実物を模型化する習慣が長く続くと、そのことには氣づかなくなり、模型が、即ち実物自身であるように感じ、自分が勝手に造った境界を、あたかもはじめからあったもののようにみなすにいたる。世の中には同じ物が幾つもあるように思ったり、名詞には、一々正確な定義がくだせるはずのものと考えて、少しも疑わないのも、右の結果である。しかし、このことに氣づかない人は、世間にはすこぶる多いようで、そのためになさずにすむべき議論が、有名な学者たちの間に、激しくたゝかわされる場合も、決してまれではない。

（丘浅次郎の文による）

七　小品二題

かくれんぼう

「もういいかあ、もういいかあ。」遠くでこういう声がする。かくれんぼうのおにが言っているらしい

が、「もういいかあ。」は少しまがぬけていると思った。わたしは二階で手紙を書いている。

まもなく下の往來をひとりは草履、ひとりはくつで駆ける足音がして來た。ふたりは駆けながら、何かせわしく話し合っていた。それがやむと、今度は景氣のいい調子で、「もういいよう。」わたしの妹の淑子の声である。

わたしは手紙を書き続けていた。しばらくして封をしながら、氣がつくと、下では子供らが何かしきりに言い合いをしていた。わたしは机越しに手を延べ、障子を五寸ばかりあけて見た。前のうちの少しくぼんだ門の所に淑子とオデットという淑子よりも一つか二つ下のフランス人の小娘とが並んで立っている。それと向かい合ってジョールという娘のにいさんが短い半ズボンの下から白いすらりとしたすねを出して立っていた。「もういいかあ。」はこの先生だった。

なんでもジョールさんのおにがあちらからかけて來ると、ふたりは藝もなく並んでそこに立っていたらしい。さがすまでもなくふたりはすぐ見つかったが、さてどちらが今度おにになるか、それがわからず、今そのもんちゃくのさいちゅうらしかった。

「ジョールさんがそこで首をこうなさったでしょう。（と淑子は自分の首をめぐらして見せ）そしたら、わたしとオデットさんと、どっちが先に見えて。」

淑子はそれさえはっきりすればこの難問題は解決されるのだというように、口を堅く結んで熱心にジョールさんの顔を見つめている。

ジョールさんは弱った。ふたりのどちらがまず自分の目に映ったろう。ジョールさんは赤皮の半ぐつの足をそろえ、まっすぐに立って、うわ目使いに淑子と妹の顔を見比べながら考えている。

金具のついた皮のバンドをゆるくしめ、腹を突き出し、両の手をうしろで握り合わせ、默って考えているジョールさんの様子はいかにも子細らしくおかしかった。

淑子もオデットさんも耳を澄まし、ジョールさんの口から出ることばを待っている。

しばらくして、「オデットだ。」とジョールさんはきっぱり言い切った。緊張はゆるむ。

「ジョールはうそ。いやだわ、わたし。」オデットさんはまゆ根を寄せ、肩につくほど首を傾け、うしろ手に門の戸をすって横歩きをしながら泣き出しそうな顔をした。

淑子は氣の毒そうに默ってしばらくそれを見ていたが、

「そんならいいわ。わたし、おにになるわ。」と言った。

「オデットずるい。」にいさんは妹をにらんだ。

「いいことよ、わたしがおにになるから。早くお逃げなさい。ね、早くお逃げなさい。わたしこゝにこうしているから。」淑子は両の手を顔に当ててうしろを向いた。

「オデット、おいで。」ジョールさんは不興げに言った。

オデットさんは不平らしい顔をしながら、それでも門の戸を離れて出て來た。そして顔を隠している淑子の方をもう一度振り返ってから、急にいきおいよくにいさんのあとを追って駆けて行ってしまった。

わたしは障子をしめた。

しばらくして、「もういいかい。」という淑子のかん高い声がした。

（志賀直哉の文による）

みかん

ある曇った冬の日暮れである。私は横須賀発のぼり二等客車のすみに腰をおろして、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には珍しく私のほかにひとりも乗客はいなかった。外をのぞくと、うす暗いプラットフォームにも、きょうは珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、たゞ、おりに入れられた小犬が一匹、時々悲しそうにほえたてていた。これらは、その時の私の心持と、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭のうちには言いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私はがいとうのポケットへじっと両手を突っこんだまゝ、そこにはいっている夕刊を出して見ようという元氣さえ起らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私は、かすかな心のくつろぎを感じながら、うしろの窓わくへ頭をもたせて、目の前の停車場がずる〳〵とあとずさりを始めるのを、待つともなく待ちかまえていた。ところが、それよりも先にけたゝましいひよりげたの音が、改札口の方から聞え出したと思うと、まもなく車掌の何か言いのゝしる声とともに、私の乗っている二等室の戸ががらりとあいて、十三、四の小娘がひとり、あわたゞしく中へはいって來た。と同時に一つずしりと搖れて、おもむろに汽車は動き出した。

小娘は、油けのない髪をひっつめのいちょうがえしに結って、横なでのあとのあるひゞだらけの両ほおを氣持の悪いほど赤くほてらせた、いかにもいなか者らしい娘だった。しかも、あかじみたもえぎ色の毛糸のえりまきがだらりと垂れさがったひざの上には、大きなふろしき包があった。そのまた包を抱えた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかり握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから、その服装が不潔なのもやはり不快だった。最後に、その二等と三等との区別さえもわきまえないおろかな心が腹だたしかった。だから、まきたばこに火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいという心持もあって、今度はポケットの夕刊を漫然と拡げて見た。

それから幾分か過ぎたのちであった。ふと何かにおびやかされたような心持がして、思わずあたりを見まわすと、いつのまにか例の小娘が、向こうがわから席を私の隣へ移して、しきりに窓をあけようとしている。が、重いガラス戸はなか〳〵思うようにあかないらしい。あのひゞだらけのほおは、いよ〳〵赤くなって、時々はなをすゝりこむ音が、小さな息の切れる声といっしょに、せわしく耳へはいって來る。これはもちろん私にも、幾分ながら同情をひくに足るものには相違なかった。しかし、汽車が今まさにトンネルの口へさしかゝろうとしていることは、暮色の中に枯れ草ばかり明かるい両側の山腹が、ま近く迫って來たのでも、すぐにがてんの行くことであった。にもかゝわらず、この小娘は、わざ〳〵しめてある窓の戸をあけようとする、その理由が私にはのみこめなかった。いや、それが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考えられなかった。だから私は、腹の底に依然としてけわしい感情をたくわえながら、あの霜焼けの手がガラス戸をあけようとしている様子を、まるでそれが永久に成功しないことでも祈るような冷酷な目でながめていた。するとまもなく、すさまじい音をはためかせて汽車がトンネルへなだれこむと同時に、小娘のあけようとしたガラス戸は、とう〳〵ばたりとあいた。そうして、その四角な穴の中から、すゝを溶かしたようなどす黒い空氣が、にわかに息苦しい煙になって、もう〳〵と車内へみなぎり出した。元來のどを害していた私は、ハンカチを

顔に当てるいとまさえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、ほとんど息もつけないほど、せきこまなければならなかった。が、小娘は私にとんじゃくするけしきも見えず、窓から外へ首をのばして、やみを吹く風にいちょうがえしのびんの毛をそよがせながら、じっと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との中にながめた時、もう窓の外が見る〳〵明かるくなって、そこから、土のにおいや枯れ草のにおいや水のにおいが、ひやゝかに流れこんで來なかったなら、ようやくせきやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしにしかりつけてでも、また、もとの通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし、汽車は、その時分には、もうやす〳〵とトンネルをすべりぬけて、枯れ草の山と山との間にはさまれた、ある貧しい町はずれの踏切に通りかゝっていた。踏切の近くには、いずれも見すぼらしいわら屋根やかわら屋根がごみ〳〵とせま苦しくたてこんで、踏切番が振るのであろう、たゞ一りゅうのうす白い旗がものうげに暮色をゆすっていた。やっとトンネルを出たと思う——その時、その蕭索とした踏切のさくの向こうに、私は、ほおの赤い三人の男の子が、めじろ押しに並んで立っているのを見た。かれらはみな、この曇天に押しすくめられたかと思うほど、そろってせいが低かった。そうしてまた、この町はずれのいんさんな風物と同じような色の着物を着ていた。それが、汽車の通るのを仰ぎ見ながらいっせいに手をあげるが早いか、いたいけなのどを高くそらせて、なんとも意味のわからない喊声を一生けんめいにほとばしらせた。するとその瞬間である。窓から半身をのり出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつと伸ばして、いきおいよく左右に振ったと思うと、たちまち、心をおどらすばかり暖かな日の色に染まっているみかんが、おゝよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばら〳〵と空から降って行った。私は思わず息をのんだ。そうして、せつなにいっさいを了解した。小娘は、おそらくこれから奉公先へおもむこうとしている小娘は、そのふところに藏していた幾ばくかのみかんを窓から投げて、わざ〳〵踏切まで見送りに來た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帶びた町はずれの踏切と、小鳥のように声をあげた三人の子供たちと、そうして、その上に乱れ落ちるあざやかなみかんの色と——すべては汽車の窓の外に、またゝくひまもなく通り過ぎた。が、私の心の上には、せつないほどはっきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、あるえたいの知れないほがらかな心持がわきあがって來るのを意識した。私は、昂然と頭をあげて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は、いつかもう私の前の席に帰って、あい変わらずひゞだらけのほおをもえぎ色の毛糸のえりまきにうずめながら、大きなふろしき包を抱えた手に、しっかりと三等切符を握っていた。

（芥川龍之介の文による）

八　非凡なる凡人

上

ぼくの子供の時からの友に桂正作という男がある。ことし二十四で、今は横浜のある会社に技手として雇われ、もっぱら電氣事業に從事しているが、まずこの男ほど類の違った人物はあるまいかと思われる。

非凡人ではない。けれども凡人でもない。さりとて偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人というが最も適評かとぼくは思っている。

ぼくは知れば知るほど、この男に感心せざるを得ないのである。感心するといったところで、秀吉や、ナポレオンや、その他の天才に感心するのとは違う。この種の人物は千百歳にひとりも出るか出ないかであるが、桂正作のごときは、平凡なる社会が常に産出しうる人物である。また、平凡なる社会が常に要求する人物である。であるから、桂のような人物がひとりふえれば、それだけ社会が幸福になるのである。ぼくが桂に感心するのは、この意味においてである。また、ぼくが桂を非凡なる凡人と評するのも、この故である。

ぼくらがまだ小学校に通っている時分であった。ある日、その日は日曜で、ぼくは四、五人の学校なかまと小松山へ出かけ、戰爭のまねをして、われこそ秀吉だとか、義経だとか、十三、四にもなりながら、ばかげたわんぱくを働いて大あばれにあばれ、ついにのどがかわいて來たので、山のすぐふもとにある桂正作のうちの庭へ、裏山からどや〳〵と駆けおりて、案内もこわず、いきなり井戸端に集まって、われがちにと水をくんで飲んだ。

すると、二階の窓から正作が顔を出してこちらを見ている。ぼくはこれを見るや、「來ないか。」と呼んだ。けれども、かれはいつにないまじめくさった顔つきをして、頭を横に振った。わんぱくの方でも人並みのことをしてのける桂正作が、不思議にきょうは出て來ないので、ぼくらもしいては誘わず、そのまゝまた山に駆け登ってしまった。

騒ぎくたびれてみんな散り〳〵にわがやへ帰り、ぼくはひとり桂のうちに立ち寄った。默って二階へあがって見ると、正作は「テーブル」に向かい、いすに腰を掛けて、一心に何か読んでいる。

もっとも「テーブル」といっても、そまつな日本机の両脚の下に継合をした品物で、いすも足継の下に箱を置いただけのものである。けれども、正作はまじめにこのくふうをしたので、学校の先生が日本流の机は衛生にわるいと言ったことばをなるほどと感心して、すぐこれだけのことを実行したのである。そして、その後常にこのいす、テーブルでかれは勉強していたのである。そのテーブルの上には教科書その他の書籍をていねいに重ね、筆墨の類まで決して乱雑に置いてはない。かれは日曜のいい天氣であるにもかゝわらず、なんの本かわき目もふらずに読んでいるので、ぼくはそのそばに行って、

「何を読んでいるのだ。」と言いながら見ると、洋とじの厚い本である。

「西國立志編だ。」と答えて顔をあげ、ぼくを見たそのまなざしはまだ夢のさめない人のようで、心はなお書籍の中にあるらしい。

「おもしろいかね。」

「うん。おもしろい。」

「日本外史とどっちがおもしろい。」と、ぼくが問うと、桂は微笑を含んで、ようやくわれにかえり、いつもの元氣のよい声で、

「そりゃあ、この方がおもしろいよ。日本外史とは物が違う。ゆうべ、ぼくは梅田先生のところから借りて來てから読みはじめたけれども、おもしろくてやめられない。ぼくはどうしても一冊買うのだ。」と言って、うれしくてたまらないふうであった。

その後桂はついに西國立志編(スマイルスの自助論)を一冊買い求めたが、その本というのは粗末至極な洋とじで、一度読みおわらないうちにすでにばら〳〵になりそうなしろもの故、かれはこれをじょうぶな麻糸でとじなおした。

この時桂もぼくも数え年の十四歳であった。桂は一度西國立志編のうまみを知って以後は、何度この書を読んだか知れない。ほとんどあんしょうするほど熟読したらしい。そして今日といえども常にこれを座右に置いている。

げに桂正作は生きた西國立志編といってよかろう。桂自身でもそう言っている。

「もしぼくが西國立志編を読まなかったらどうであったろう。ぼくの今日あるのは全くこの書のおかげだ。」と。

けれども西國立志編を読んだ者は、洋の東西を問わず幾百万人あるかしれないが、桂正作のように、「予を作りしものはこの書なり。」と明言しうる者は果たして幾人あるだろう。

天が與えた才能からいうと、桂は中位の人たるにすぎない。学校における成績も中等で、同級生のうち、かれよりもすぐれた少年はいくらもいた。また、かれはかなりのわんぱく者で、ぼくらといっしょにずいぶんあばれたものである。それで、学校においても郷党にあっても、特に人から注目せられる少年ではなかった。

けれども天の與えた性質からいうと、かれは率直で、單純で、そしてどこかにおさうべからざる勇猛心を持っていた。勇猛心というよりか、敢爲の氣象といった方がよかろう。卽ち一轉すれば冒險心となり、再轉すれば山氣となるのである。現にかれの父は山氣のために失敗し、かれの兄は冒險のために死んだ。けれども正作は西國立志編のおかげで、この氣象に訓練を加え、堅実なる有爲の精神としたのである。

小学校を卒業するや、ぼくは縣下の中学校にはいってしまい、しばらく故郷を離れたが、正作は家政の都合で、そういうわけにゆかず、周旋する人があって、なにがし銀行に出ることになり、給料四円か五円かでなにがし町まで二里の道を朝夕往復することになった。

まもなく冬休みになり、ぼくは帰省の途についてふるさと近く車で來ると、小さな坂がある。そのふもとで車をおり、手荷物を車夫に託し、自分はステッキ一本で坂を登りかけると、ぼくの五、六間さきを行く少年がある。身に古ぼけたとんびを着て、手に古ぼけた手さげカバンを持って、静かに坂を登りつゝある、その姿がいかにも桂正作に似ているので、

「桂君じゃないか。」と声をかけた。うしろを振り向いて破顔一笑したのはまさしく正作。立ちどまってぼくを待ち、

「冬休みになったのか。」

「どうだ、きみはまだ銀行に通ってるか。」

「うん、通ってるけれども、少しもおもしろくない。」

「どうしてや。」

と、ぼくは驚いて聞いた。

「どうしてというわけもないが、きみなら三日としんぼうができないだろうと思う。第一ぼくは、銀行業からしてぼくの目的じゃないのだもの。」ふたりは話しながら歩いた。車夫のみ先へやり。

「何がきみの目的だ。」

「工業で身を立てる決心だ。」と言って正作は微笑し、「ぼくは毎日この道を往復しながらいろ〳〵考えたが、発明に越す大事業はないと思う。」

ワットやスティーヴンソンやエジソンはかれが理想の英雄である。そして西國立志編はかれのバイブルである。

ぼくの默ってうなずくのを見て、正作は更にことばをつぎ、

「だからぼくは來春は東京へ出ようかと思っている。」

「東京へ。」と驚いて問い返した。

「そうさ、東京へ。旅費はもうできたが、向こうへ行って三月ばかりを食えるだけの金を持っていなければ困るだろうと思う。だからぼくは父に頼んで來年の三月までの給料は全部ぼくがもらうことにした。だから四月早々はたてるだろうと思う。」

桂正作の計画はすべてこの筆法である。かれはずいぶん少年にありがちな空想を描くけれども、計画を立ててこれを実行する上については、少年の時から今日にいたるまで少しも変わらず、一定の順序を立てて一歩一歩と着々実行してついに目的通りに成就するのである。むろんこれは西國立志編の感化でもあろう。けれども一つにはかれの性情が祖父に似ているからだと思われる。かれの祖父の非凡な人であったことを今こゝでくわしく話すことはできないが、その一つをいえば、眞書太閤記三百卷を写すに十年計画を立てて、ついにみごと写しおわったことがある。ぼくも桂のうちでこれを実見したが、今でもその氣根の大いなるに驚いている。正作は確かにこの祖父の血を受けたに違いない。もしくはこの祖父の感化を受けただろうと思う。

途上、種々の話でわれ〳〵ふたりは夕暮れに帰宅し、その後ぼくは毎日のように桂に会って互に將來のアンビションを語り合った。冬休みが終り、いよ〳〵ぼくは中学校の寄宿舍に帰るべくふるさとを出立する前の晩、正作がたずねて來た。そして言うには、今度会うのは東京だろう、三、四年は帰郷しないつもりだからと。ぼくもそのつもりで正作に別れを告げた。

明治二十七年の春、桂は計画通りに上京し、東京から二度手紙をよこしたけれど、いつも無事を知らせるばかりで別に着京後の様子を告げない。また、くにの者もだれもどうして正作が暮らしているか知らない。父母すら知らない。たゞ何人も疑わないことが一つあった。いわく、桂正作はなんらかの計画を立ててその目的に向かって着々歩を進めているだろうという事実である。

ぼくは三十年の春上京した。そして宿がきまるや、さっそく築地何町何番地なんのなにがし方という桂の住所をたずねた。この時ふたりはすでに十九歳。

下

午後三時ごろであった。ぼくは築地何町をすみからすみまでさがして、ようやくのことで桂の住みかをさがし当てた。容易にわからぬも道理、なにがし方というそのなにがしは車屋の主人ならんとは。とある横町の貧しげな家ばかり並んでいる中にはさまって九尺間口の二階屋、その二階が、「生ける西國立志編」君の巣である。

「桂君という人があなたのところにいますか。」

「へい、いらっしゃいます。あの、書生さんでしょう。」とのあいさつ。声を聞きつけてみし〳〵と階

段をおりて來て、「やあ。」と現われたのが、一別以來三年会わなんだ桂正作である。

足も立てられないようなきたない疊を二、三枚歩いて、狹い急なはしご段を登り、通された座敷は六疊敷、すゝけた天井低く頭を圧し、疊も黒く壁も黒い。

けれども黒くないものがある。それは書籍。桂ほど書籍をたいせつにするものは少ない。かれはいかなる書物でも決して机の上や、座敷のまん中に放擲するようなことなどはしない。こういうと桂は書籍ばかりをたいせつにするようだが必ずしもそうでない。かれは身のまわりの物すべてを大事にする。

見ると机もかなりりっぱ。本箱もさまで黒くない。かれはその必要品を粗略にするほど、東洋豪傑風の美点も悪癖も受けていない。今の流行語でいうと、かれは西國立志編の感化を受けただけにすこぶるハイカラ的である。今にして思う。ぼくはハイカラの精神のわが桂正作を支配したことを天に感謝する。

机の上を見ると、教科書用の書籍その他が、例のごとく整然として重ねてある。その他周囲の物すべてがみなその所を得て、きちんとしている。

へやの下等にして黒く暗澹たるを憂うるなかれ。桂正作はその主義と、その性情によって、すべてこれらの黒くして暗澹たるものをば化して純潔にして高貴、感嘆すべく畏敬すべきものとなしているのである。

かれは例のごとくいとも快活に胸奥を開いて語った。ぼくの問うがまに〳〵、上京後のかれの生活をば、恥じもせず、誇りもせず、平易に、率直に、くわしく話して聞かせた。

かれほど虚栄心の少ない男は珍しい。その境遇に処し、その信ずるところを行うて、それで満足し、安心し、そして勉励している。かれは決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことをなして、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。

一別以來、正作のなしたことを聞くと実にこの通りである。ぼくは聞いているうちにもます〳〵かれを尊敬する念を禁じえなかった。

かれは計画通り三箇月の糧を蓄えて上京したけれども、坐してこれをくらう男ではなかった。何がなおもしろい職を得たいものと、まず東京市中を足にまかしてへめぐり歩いた。そして思いついたのは新聞賣りと砂書き。九段の公園で砂書きのおやじを見て、かれは直ちにこれと物語り、事情を明かして弟子入りを頼み、それより二、三日の間けいこをして、まもなく大道のかたわらにすわり、一銭、五厘、時には二銭を投げてもらってでたらめを書き、いくらかずつの收入を得た。

ある日、かれは客のなさまゝに、自分で勝手なことを書いては消し、ワット、スティーヴンソン、などいう名を書いていると、八つばかりの男の子を連れた身なりのよい婦人が前に立った。「ワット」と子供が読んで、「おあさま、ワットとはなんのこと。」と聞いた。桂は顔をあげて子供にわかりやすいようにこの大発明家のことを話して聞かせ、「坊さまも大きくなったらこんなえらい人になりなさいよ。」と言った。そうすると婦人が、「失礼ですけれど。」と言いつゝ二十銭銀貨を手渡しして立ち去った。

「ぼくはその銀貨をつかわないでまだ持っている。」と正作は言って罪のない微笑をもらした。

かれはかく労働している間、その宿所は木賃宿、夜は神田の夜学校に行って、もっぱら数学を学ん

でいたのである。

かくてその年も暮れ、二十八年の春になって、かれは首尾よく工手学校の夜学部に入学しえたのである。

かつ問いかつ聞いているうちに夕暮れ近くなった。

「飯を食いに行こう。」と、桂は突然言って、机の引き出しから手早くがま口を取り出してふところへ入れた。

「どこへ。」と、ぼくは驚いて尋ねた。

「飯屋へさ。」と言って正作は立ちかけたので、

「いや、飯ならぼくは宿へ帰って食うから心配しない方がいいよ。」

「まあ、そんなことを言わないでいっしょに食いたまえな。そして今夜はこゝへとまりたまえ。まだ話がたくさん残っている。」

ぼくもその意に従い、ふたりして車屋を出た。道の二、三丁も歩いたが、桂はその間も愉快に話しながら、國もとのことなどを聞き、ことしのうちに一度くにへ帰りたいなど言っていた。けれどもぼくは桂の生活の模様から察して、三百里外の故郷へ往復することの、とうてい言うべくして行うべからざるを思い、別に氣にもとめず、帰れたら一度帰って父母を見舞いたまえぐらいの軽いあいさつをしておいた。

「こゝだ。」と言って桂は先に立って、なわのれんをくぐった。ぼくはびっくりして、しばしためらっていると、うちから、

「おい、きみ。」と呼んだ。しかたがないからはいると、桂はほどよき場所に陣取って、えみを含んでこっちを見ている。見まわすと、桂のほかに四、五名の労働者らしい男がいて、長い食卓について、飯を食う者、酒を飲む者、ことのほか静閑である。ふたりさし向かいで卓によるや、

「ぼくは三度三度こゝで飯を食うのだ。」と、桂は平氣で言って、「きみは何を食うか、なんでもできるよ。」

「なんでもいい、ぼくは。」

「そうか、それでは。」と、桂は女中に向かって二、三品命じたが、その名はふちょうのようで、ぼくにはわからなかった。しばらくすると、さしみ・煮ざかな・煮しめ・しるなどが出て、飯を盛った茶わんに香の物。

桂はうまそうに食いはじめたが、ぼくはなんとなくきたならしい氣がして食う氣にならなかったのを無理に食いはじめていると、思わず涙がこみあげて來た。いや〳〵ながらはしを取って二日三日食うや、卒然、ぼくは思った。あゝこの飯はこの有爲なる、勤勉なる、独立自活してみずから教育しつつある少年が、労働してもうけえた金で、心ばかりのちそうをしてくれる好意だ、それをなんぞや、まずそうにくらうとは、桂はこゝで三度の食事をするではないか、これをいや〳〵ながら食う自分はかれの竹馬の友といわれようかと、そう思うとぼくは思わず涙をのんだのである。そしてぼくは急に胸がすが〳〵して、桂とともにうまく食事をして、なわのれんを出た。

その夜ふたりで薄いふとんにいっしょに寝て、夜のふけるのも知らず、小さな豆ランプのおぼつかない光のもとで、くにのことやほかの友の上のことや、行く末の望みを語り合ったことは、今でも思

い起すと、樂しいなつかしいその夜のさまが目の先に浮かんで來る。

その後、ぼくと桂は互に往來していたが、早くもその年の夏休みが來た。するとある日、桂がぼくの下宿屋へ來て、

「ぼくはくにへ歸って來ようかと思う。実はもうきめているのだ。」と言う意外なことば。

「それはいいけれどもきみ……。」と、ぼくはすぐ旅費などのことを心配して口を開くと、

「実は金もできているのだ。三十円ばかり貯蓄しているから、往復の旅費とみやげ物とで二十円あったらよかろうと思う。三十円みんなつかってしまうとあとで困るからね。」と言うのを聞いて、ぼくはいまさらながらかれの用意のほどに感じ入った。かれの話によると二年前からすでに帰省の計画を立ててそのつもりで貯金したとのこと。

そこでぼくも大いに喜んでかれの帰國を送った。かれは二年間の貯蓄の三分の二を平氣でなげうって、にしき絵を買い、母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然として新橋をたった。

翌年三十一年にめでたく学校を卒業し、電氣部の技手として横浜の会社に給料十二円で雇われた。その後今日まで五年になる。その間かれは何をしたか。たゞその職分を忠実に勤めただけか。そうでない。

かれは大いなることをしている。かれの弟がふたりあって、ふたりともかれの兄、逃亡した兄に似て手に合わないとっぴ者、ひとりを五郎といい、ひとりを荒雄という。五郎は正作が横浜の会社に出たと聞くや、國もとを飛び出して、東京に來た。正作は五郎のために、所々奔走して、あるいは商店に入れ、あるいは学僕としたけれど、五郎はいたるところで失敗し、いたるところを逃げ出してしまう。

けれども正作は根氣よく世話をしていたが、ついに五郎を自分のそばに置き、種々に訓戒を加え、西國立志編をくり返して読ませ、そして工手学校に入れてしまった。わずかの給料でみずからくらい、弟を養い、三年の間、辛苦に辛苦を重ねた結果は三十四年にいたって現われ、五郎は技手となって、今は東京芝区のなにがし会社に雇われ、まじめに勤務しているのである。

荒雄もまた國を飛び出した。今は正作と五郎とふたりでこの弟の処置に苦心している。

ことしの春であった。夕暮れにぼくは、横浜野毛町に桂をたずねると、宿の者が、「桂さんはまだ会社です。」と言うから、会社の様子も見たく、その足で会社をとうた。

桂の仕事をしている場所に行ってみると、ぼくは電氣のことをくわしく知らないから十分の説明はできないが、一本の太い鉄柱を擁して数人の人が立っていて、正作はひとりその鉄柱の周囲を幾たびとなくまわって熱心に何事かしている。もはや電燈がついて真晝のごとくこの一群れの人を照らしている。人々は默して正作のするところを見ている。機械に狂いの生じたのを正作が檢分し、修繕しているのらしい。

桂の顔、様子。かれは無人の地にいて、われを忘れ世界を忘れ、身も魂も、今そのなしつゝある仕事に打ちこんでいる。ぼくは桂の容貌のかくまでにまじめなるを見たことがない。見ているうちに、ぼくは一種の荘厳の感に打たれた。

（國木田独歩の文による）

九 ピノチオ

「ピノチオ」というのは、イタリア童話の名高い主人公―木製人形―の名まえである。本國では「ピノッキオ」と呼ばれているが、日本では「ピノチオ」で通って來ているので、この名を用いることにした。

本課は、ピノチオ童話の一節を、人形しばいの脚本に書きかえたものである。読んでみると、やさしいし、子供っぽくて物足りないようにも感じられるが、人形を製作したり、人形を使って演出することを考えると、必ずしも容易ではない。この脚本を読み合ったり、演出したりする間に、國語学習の樂しい世界が開けるであろう。

なお、今までに読んだ童話や物語などをくふうして脚色してみよう。そうして更に演出してみたら、一段とおもしろいであろう。

出て來る人形

ピノチオ
おとうさん
少年
くず屋
人形一
人形二
親方

第一幕　ピノチオのへや

正面右寄りに窓、左の方に入口。

幕があくと、ピノチオとおとうさんが話している。

ピノチオ「おとうさん、ぼく、とてもうれしいんです。ぼく、おとうさんが大すきです。」

父　「ピノチオや、そんなにうれしいのかい。おまえがそんなに喜んでくれると、おとうさんまでがうれしくなるよ。」

ピノチオ「だっておとうさんはぼくを作ってくれた上に、こんなに上等な上着だの帽子だのまで作ってくれたんだもの。ぼく、よく似合うでしょう。まるで紳士のようだねえ。」

父　「紳士のようかね。だが、ピノチオや、紳士というものはね、たとえ身なりはそまつでも、いつも清潔にしているものなんだよ。そして美しい心を持っていて、正しい行いをするのでなくては、ほんとの紳士とはいえないんだよ。」

ピノチオ「おとうさん、ぼく、ほんとの紳士になるよ。」

父　「そうか、そうか。」

ピノチオ「それからね、ぼく、学校へも行くよ。」

父　「ほゝう、学校へ行くかい。」

ピノチオ「うん、だって紳士ってなんでも読めるんでしょう。ぼく、まだなんにも読めないから学校へ行って勉強するんだ。」

父　「そうか、それはよい。」

ピノチオ「だけど、おとうさん、学校へ行くには本がいるんでしょう。」
父　「そうだね。」
ピノチオ「おとうさん、本、買ってよう。」
父　「うん。」
ピノチオ「ね、おとうさん、買ってよう。」
父　（ひとりごと）「こまったな。買ってやりたいのだが、おとうさんは一文なしの貧乏で、本を買ってやるお金もない。」
おとうさんは、しばらく考えている。
父　「よろしい。ピノチオや。おとうさんはちょっと出て來るからね。待っておいで。」
急いで左の方へ出て行く。
ピノチオ「おとうさん、おとうさあん。」
ピノチオ、父のあとを追って戸口まで行き、また、もどって來る。
ピノチオ「おとうさん、本を買って來てくれるのかしら。」
ピノチオ、窓から外を見る。
ピノチオ「あ、雪が降って來た。」
どこかの子供たちが歌う歌が聞えて來る。しばらくして、おとうさんが左の方から、手に本を持って出て來る。
父　「さあ、ピノチオや、本を買って來たよ。」
おとうさん、本をピノチオに渡す。

ピノチオ「あ。本だ、ほんとに本だ。おとうさん、ありがとう。」
ピノチオ、おとうさんが上着を着ていないのに氣がつく。
ピノチオ「おとうさん、上着どうしたの、どこへ脱いで來たの。」
父　「なに、上着かね。おとうさんは暖かいからもういらないんだよ。それより、これでもう学校へ行けるんだね。」
ピノチオ「わかった。おとうさんは、ぼくに本を買ってくれるために、こんなに寒いのに上着を賣ったんでしょう。おとうさん、すみません。」
ピノチオ、おとうさんに抱きつく。
父　「いいんだよ、いいんだよ。」
おとうさんはピノチオをはげしく抱きしめる。
静かに幕をしめる。

第二幕　人形しばいの小屋の前

右の方に人形しばいの小屋が見える。
樂隊が聞えている。幕があくと、ピノチオ、左の方から、本を持って出る來る。
ピノチオ「さ、早く学校へ行こう。あれ、なんだろう。あんな所で何をやっているんだろう。おもしろそうだなあ。」
右の方から少年が出て來る。

ピノチオ「あの。きみ、きみ。」
少　年「なんだい。」
ピノチオ「あれ、何やってるの。」
少　年「見ればわかるじゃないか。ほら、看板に書いてあるだろう。」
ピノチオ「なんて書いてあるの。ぼく、読めないんだよ。」
少　年「あんなやさしい字が読めないのかい。『にんぎょうしばい』って書いてあるんだよ。」
ピノチオ「おもしろいかい。」
少　年「おもしろいさ。だけど五円いるんだよ。」
ピノチオ「ぼく、見たいな。だけど、ぼく、お金持ってないんだ。きみ、ぼくに五円貸してくれないか。」
少　年「いやだよ。」
ピノチオ「そんなら、きみ、この上着、五円で買ってくれないか。」
少　年「なあんだ、千代紙の上着なんか。」
ピノチオ「この帽子は。」
少　年「そんなバンくずの帽子なんか、雨にあったらだいなしだ。」
ピノチオ「そんなら、きみ、この本は。」
少　年「きみ、子供どうしで何か賣ったり買ったりするのはいけないんだよ。」
少年、人形しばいの小屋の方へはいる。

くず屋、左の方から出て來る。
くず屋「にいちゃん、おじさんが買ってあげようか。」
ピノチオ「あ、おじさん買ってくれる。」
くず屋「五円ならね。」
くず屋、ピノチオから本を受け取って、お金を渡す。
ピノチオ「ありがとう、ぼく、人形しばいを見よう。」
ピノチオ、人形しばいの小屋の方へはいる。
小屋の方から拍手が聞えて來る。
くず屋（ひとりごと）「これはなか〳〵いい本だぞ、うまい、うまい。」（歩きはじめる）「くずういー、くずういー、くずやおはらあい。」
くず屋、左の方へはいる、靜かに幕をしめる。

第三幕　小屋の中（舞台裏）
箱が置いてある。
幕があくと、ピノチオが箱によりかゝって泣いている。
ピノチオ「あゝん、あん〳〵、おとうさん、おとうさあん。」
人形一、人形二、左の方から出る。
人形一「まあ、かわいそうにね。ピノチオ。ほんとにピノチオには罪はないのにねえ。」

人形二「そうだ、おれたちが悪かったんだよ。ピノチオを舞台の上にあげて、しばいをこわしてしまったからなんだ。ピノチオ、許しておくれね。」

ピノチオ「あゝん、あん〳〵、おとうさあん。ぼくが悪かったんです。学校へ行く途中で、しばい小屋なんかへはいったからです。ごめんなさい、おとうさあん。」

親方、右の方から出る。

親　方「こら、だれだ。そんなところでごそ〳〵騒いでいるのは。」

人形一、人形二、箱のかげに隠れる。

親　方「小僧、まだ泣いてるのか。泣くのをやめろ。おれは泣き声が大きらいなんだ。」

ピノチオ「おじさん、ぼく、帰らないと、おとうさんがかわいそうなんです。たったひとりぼっちなんです。」

親　方「なに、ひとりぼっちだと。おかあさんはいないのか。」

ピノチオ「はい、おかあさんはいません。」

親　方「ふうん、おとうさんは何してるんだ。」

ピノチオ「貧乏してるんです。」

親　方「なに、貧乏してる。はっははは。」

ピノチオ「そうなんです。ぼくの本を買うのに、おとうさんは上着を賣って、買ってくださったほどなんです。だからぼく、働いてお金もうけたら、おとうさんにりっぱな上着を買ってあげるんです。」

親　方「なんだって。上着を賣って本を買ってくれたんだって。」

ピノチオ「そうです。だのに、ぼく、人形しばいにはいりたくて、その本を賣ってしまったんです。」

親　方「こら、おれはな、今夜、焼肉をたべなくちゃならんのだ。それで薪のかわりに、しばいをめちゃめちゃにしたおまえを火にくべるつもりだったんだがな、おまえのおとうさんにめんじておまえを許してやる。」

ピノチオ「えっ、許してくださるんですか。ほんとですか。このぼくを許してくださるんですか。」

人形一、人形二、箱のかげから出る。

親　方「よし。では、今晩はおまえたちをピノチオのかわりに火にくべてやる。」

ピノチオ「えっ、ぼくを助けるかわりにこの人たちを焼くんですって。それはいけません。悪いのはぼくなんです。その人たちを焼くくらいなら、ぼくを焼いてください。さあ、ぼくを焼いてください。」

親　方「はくしょん、はあくしょん。おまえはなんという感心な子だ。よろしい。みんな許してやる。」

ピノチオ「えっ、ほんとうですか。みんな許してくださるんですか。」

親　方「そうだ、みんな許す。今夜はな——はあくしょん——焼肉を食うのはやめだ。」

三人、喜ぶ。

親　方「こゝに金貨が五枚ある。おまえがなくしたお金のかわりにこれをやる。これでおとうさんの上着もおまえの本も買うがよい。」

親方、ピノチオに金貨を渡す。

ピノチオ「おじさん、ぼくにこんなに金貨までくださるんですか。あゝ、なんというありがたいことだろう。」

人形二「ピノチオ、よかったなあ。」

人形一「よかったわねえ。」

ピノチオ「おじさん、ありがとう。みなさんありがとう。」

ピノチオ、おじぎをくり返す。

親方「あはははっは。」

人形一、人形二も笑う。にぎやかな笑いのうちに幕をしめる。

（松葉重庸の作による）

國語学習の手引

中等國語一（2）に載せてある教材は、次に掲げた作者の作品によったものである。こゝに記さない教材は、古典ならびに文部省作である。

課名	題目	原作者	訳者	原典
一	あゆのかげ	室生犀星		室生犀星全集
二	ノートの中から	島崎藤村		藤村全集
三	心の小径	金田一京助		北の人
五	雪もちの竹	山本有三		「銀河」第二巻第一号
六	実物とその模型	丘浅次郎		猿の群から共和國まで
七	小品二題			
	かくれんぼう	志賀直哉		志賀直哉全集
	みかん	芥川龍之介		芥川龍之介全集
八	非凡なる凡人	國木田独歩		國木田独歩全集
九	ピノチオ	松葉重庸		

國語学習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行ってほしい。

一　あゆのかげ

（1）この詩に書かれている情景について話し合い、この詩の特色を考えてみる。

（2）次の問について考える。

イ、「その影は白い砂地に」はどこへ続くのか。

ロ、「水のかげまで玉をつゞって、底砂へ落ちて行く」というのはどういうことか。

ハ、「すらりと群れをぬいた大きなあゆ」というのはどういうことか。

（3）この詩に最も適した朗読のしかたをくふうする。

（4）ほかにこの作者の詩をもっと読んでみる（例えば、動物詩集のようなもの）。
（5）生物に取材した詩を作ってみる。

二　ノートの中から

（1）この課は幾つの部分からできているかを調べる。また、これを一課にまとめた理由は何か、それについて考えてみる。
（2）野や畑にあるおもちゃには、どんなものがあるか、箇條書きにしてみる。
（3）「書籍」の「一」と「二」との間にはどのような関係があるかを考えてみる。
（4）次の問に答える。
　イ、「心の旅」というのはどういうことか。
　ロ、「小さな本」というのはどういうことか。
　ハ、「あるお墓」とあるが、それはどんな墓か考えてみる。
　ニ、「お墓から起きあがって來ました」というのはどういうことか。
（5）「落ち葉」における自然の変化を箇條書きにしてみる。
（6）島崎藤村について調べる。
（7）ふだんの生活の中から、氣づいたことがらを、ノートに書いておく。

三　心の小径

（1）この文から、心の小径が通じるようになった順序を読みとり、整理してみる。
（2）次のことばを本文について説明する。
　イ、「禁園のかきね」というのは何か。
　ロ、「心の城府へ通う唯一の小径」というのはどういうことか。
　ハ、「渠成って水いたる」というのはどういうことか。
（3）できたら、アイヌの生活について社会科の先生にきいてみる（例えば、歌謡とか傳説などについて）。
（4）「世界をつなぐもの」と本課と関係があるかないかを考えてみる。
（5）その土地の方言を調べてみる。その苦心と成果とを作文に書く。

四　創始者の苦心

（1）すら〳〵と読めるようにする。そして大意をまとめてみる。
（2）「ターフル＝アナトミア」はどんな本か。どうしてその本を読みぬいたか、その順序を箇條書きにしてみる。
（3）この文に出て來る人物について調べる。そしてなぜこれらの人は蘭語を学んだかを考えてみる。
（4）外國語を学ぶには、どんな苦心があるか、「三　心の小径」と比較してみる。自分たちの外國語学習について話し合う。

（5）創始者の苦心ということを、ほかの例について調べる。

五　雪もちの竹

（1）ラッドの、日本人の長所と短所とに関する意見を箇條書きにしてみる。
（2）さくらはどうして日本の代表的な花とされていたか。
（3）作者は雪もちの竹にどんな意味を持たせようとしているか。
（4）人の講演について、その大要をまとめたり、感想を書いたりする。また、自分の考えや調べたことについておゝぜいの前で話す練習をしてみる。

六　実物とその模型

（1）一・二・三・四は、それ〴〵どういうことを言っているか考えてみる。
（2）この課に書かれていることを、短いことばで言ってみる。
（3）差異をけずり去った実例、境界を造った実例を箇條書きにする。
（4）次の三つのことがらを、連絡をつけて考えてみる。そして話し合う。
　イ、物を考える。
　ロ、模型化。
　ハ、ことば。

（5）本文のことがらを裏づけるような事実を日常生活からさがしてみる。

七　小品二題

（1）「かくれんぼう」と「みかん」の読後感を話し合う。
（2）次の問に答える。
　イ、「かくれんぼう」の「難問題」の解決を一番よく表わしていることばはどれか。
　ロ、「みかん」の中で、「せつなにいっさいを了解した。」というのはどういうことか。
（3）この二つの小品を比べてみて、文の書き方の差異について話し合う。
（4）志賀直哉作「もず」、芥川龍之介「トロッコ」などの小品を読んでみる。
（5）めい〴〵の生活に取材した小品を作る。
（6）作者について調べる。

八　非凡なる凡人

（1）この文の大意をつかむ。
（2）どうして「非凡なる凡人」と言ったのかを考えてみる。
（3）桂正作の性格について話し合う。
（4）その性格をはっきり表わしていることばを書き出してみる。
（5）「小品二題」とこの文を比べてみる。

(6) めい〳〵の身近のことがら（友だち・兄弟・先生など）に取材して、このような長い話を書いてみる。
(7) 作者について調べ、その作品を読む。
(8) できたら、この内容を脚本に書きなおして演出してみる。

九　ピノチオ

(1) 登場人物の性格について話し合う。
(2) その性格がよく出るように、この脚本を読み合ってみる。
(3) 人形を製作して、演出してみる。できばえについて話し合う。
(4) 人形しばいの脚本を作り、これを演出してみる。

23

中等國語
一
(2)

昭和二十二年九月　四　日印　刷　同日繙刻印刷
昭和二十二年九月　八　日発　行　同日繙刻発行
昭和二十三年五月二十九日修正印刷　同日修正繙刻印刷
昭和二十三年六月　二　日修正発行　同日修正繙刻発行
「昭和二十三年六月二日　文部省検査済」

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE May 29, 1948)

著作権所有
著作兼発行者　文部省

繙刻発行者　東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者　阿部眞之助

印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地
二葉印刷株式會社
代表者　大野治輔

発行所　東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

P.T.A.

広島大学図書
0130449577